

専門科目

メディア表現特論A(表現×情報・メディア) Media Creation A (Creation× Information・ Media)

担当:三輪真弘・前田真二郎・大久保美紀

単位:2単位 履修対象:1年/2年

学期:後期後期(12月/1月) 実施方法:オンライン

科目のねらい・特色

音楽・映像・美術などの表現を、実作者からの視点を交えながら理解を深めていく授業です。まず、芸術諸分野における近年の動向を分析します。そして、映像表現史を俯瞰し、作品を読み解く基礎的な知識を身につけます。そして、コンピュータ音楽、その中でもアルゴリズムック・コンポジションと呼ばれる作曲法を中心に、メディア社会における音楽の意義について考察します。加えて、<新しいエコロジー>のテーマに関して、キュレーターの視点から現代美術における重要な試みとその思想に着眼し、美術表現の可能性を探ります。異なる分野の教員が合同で授業を行い、ディスカッションを行います。

到達目標

現代のメディア表現を理解する手掛かりとなる知識を講義を通して身につけます。授業では多数の作品を取り上げますが、それらが生まれた文化的・技術的な背景を意識しながら作品を鑑賞・分析できるようになることを目指します。今日の表現は突然現れたものではなく、多種多様な表現の上に成立しています。作品を構造的に読み解く能力を養い、メディア表現の研究・制作において必要不可欠な論理思考を高めることを目標とします。

講義形態

講義、ディスカッション、レポート

講義計画・項目

- 第1回 再考「方法主義」(1) 12/4(2コマ)
- 第2回 再考「方法主義」(2) 12/11(2コマ)
- 第3回 逆シミュレーション音楽 / テクノロジーと声 12/18(2コマ)
- 第4回 個人映像表現史 1/11(2コマ)
- 第5回 写真表現と現代映像 1/15(2コマ)
- 第6回 エコロジーと美術表現 1/22(2コマ)
- 第7回 エコロジーと美術展 1/26(1コマ)
- 第8回 メディア表現の現在 1/31(2コマ)

教科書・参考書等

必要に応じて随時配布、指定します。

評価方法

種別	割合	備考
----	----	----

課題	50%	レポートなど
日常点	50%	授業に対する取り組み姿勢

メディア表現特論B(表現×身体・環境) Media Creation B (Creation×Body・Environment)

担当: 小林昌廣・赤松正行・前林明次

単位: 2単位 履修対象: 1年 / 2年 教室: (対面の場合) 事前に指定

学期: 後期(10月/11月) 実施方法: オンライン13回、対面2回

科目のねらい・特色

1990年代初頭にあらわれた「メディア・アート」と呼ばれる表現は、情報技術の更新をいち早く取り込み、諸領域を横断し、新旧のメディアをかつてない方法で連結するだけでなく新たなメディアを発明するなど、そのあり方自体が既存のフレームを逸脱していく運動としてとらえることができます。ソーシャルメディアに代表されるコミュニケーション、自然災害や環境・エネルギー問題、メディアを介した見世物的な催しやそれへの過度な依存など、あらゆる日常が非日常と境界線を持たなくなった現在において、メディア表現のもつ意味や可能性をあらためて検討することが必要となっています。それは同時に人間存在や世界との関わりを再検討することにもなるでしょう。授業では毎回、担当する教員がそれぞれの視点からテーマに沿った事例を挙げ、問題提起および分析、考察を行います。また3人の教員による対話の機会を設けることで、問題の共有と相互触発を活性化します。

到達目標

一口に「メディア・アート」と言ってもカバーする領域は広大かつ多様であるため、履修者は各教員が提示する具体的な視点やテーマ設定からその背景と概念について理解を深めます。また履修者は、各講義においてつねに批判的な思考をもって参加し、コメントすることが期待されます。さらに、各教員が紹介する個々の主題や事例の中に自身の制作・研究との関連性や差異を積極的に見出し、自己の思考の更新、深化のための手がかりを得ることを目指します。

講義形態

講義とディスカッション、簡単な課題制作

講義計画・項目

第1回(9/29 全担当教員) オープニング

第2回(10/6 赤松) モビリティの歴史的変遷

第3回(10/6 赤松) モビリティの社会的戦略

第4回(10/13 小林) メディア身体論

第5回(10/13 小林) AI身体論

第6回(10/20 前林) メディアと知覚

第7回(10/20 前林) 「感覚」をつくる技術

第8回(10/27 赤松) リアリティの認知的変容

第9回(10/27 赤松) リアリティの身体的転回

第10回(11/10 小林) メディア憑在論

第11回(11/10 小林) アバターの哲学

第12回(11/17 前林) 場所・感覚・メディア (1)

第13回(11/17 前林) 場所・感覚・メディア (2)

第14回(11/24 全担当教員) 課題発表・講評

第15回(11/24 全担当教員) クロージング

教科書・参考書等

必要に応じて授業中に紹介します。

評価方法

種別	割合	備考
課題	25%	課題
日常点	75%	出席並びに受講態度

メディア表現特論C(表現×科学・社会) Media Creation C (Creation× Science・Society)

担当・Castro Juan・四方幸子(非常勤)・松井茂・松田愛(非常勤)

単位:2単位 履修対象:1年/2年 教室:講義室W(W301)・オンライン

学期:後期(12月/1月)

科目のねらい・特色

ポストパンデミックの世界に入り、近代を基盤にして形成されてきた諸システム(科学も含まれる)や人間中心主義的な価値観の再考がうながされつつある。現代において科学技術は、私たちに「現実とは」「人間とは」「生命とは」など、哲学・倫理的な問いを投げかけている。また現代は、人間が地球環境に及ぼした取り返しのつかない影響を表す「人新世」という地年代にあるとされる。そのような中、メディアアートは科学技術や社会といかなる関係をもちうるのだろうか。

現在、メディア・アートは、計算機科学(AI)、生命科学、宇宙科学など最先端科学に加え、地質学、考古学、人類学、民俗学など諸領域とのコラボレーションを活発化させている。授業では、これらの事例とそこで提示されている問題系を検討していく。具体的には、カストロが生命科学の領域を、四方が自然科学・人文学の諸領域に関わるメディア・アートを取り上げる。カストロは、生命と非生命の境、生命の起源、ウェットな人工生命、エイリアン生命などに加え、合成生物学と化学、宇宙生物学の分野を扱い、四方は、人類学、考古学、民俗学、ジェンダーや先住民研究などとの関係から扱う。松井と松田は、極私的表現と社会との関わり、日常の自然現象への眼差しのあり方について、美学的観点から扱う。

到達目標

バイオメディア(biomedial)、ウェットウェア(wetware)、マイクロパーフォーマティヴィティなどの概念の変遷を辿ることにより、20世紀と21世紀の美学に新しいテクノロジーや生命科学が与えた影響を分析する(カストロ)。メディア・アートを、最先端技術の使用に加え、新旧メディアの創造的結合、そしてマージナルな位置や視点から社会に提起する問いや批評の実践として発見する(四方)。作家の個人的関心から始まったリサーチを、どのように社会化し、作品へと生成し、普遍性をもった表現へと展開していくのかを考察する(松井、松田)。各担当教員が紹介する作品や事例の中に関連性や差異を積極的に見出し、自己の思考のための手がかりを得てほしい。

講義形態

講義、ディスカッション、レポート

講義計画・項目

第1回12月4日(月)自然現象と表現:山下麻衣+小林直人《infinity mirage》について(松井)

第2回12月11日(月)眠りとアート:ソフィ・カル《眠る人々》について(松田)

第3回12月18日(月)視覚と記憶:ソフィ・カル《盲目の人々》について(松田)

第4回1月12日(金)虫と表現:野口里佳と青柳菜摘の作品について(松井)

第5回1月15日(月) バイオテクノロジーとアート(カストロ)

第6回1月22日(月)エコゾフィック・アート1:螺旋(四方)

第7回1月25日(木)エコゾフィック・アート2:波(四方)

第8回1月26日(金) 生命らしい技術とアート(カストロ)

*カストロの授業は基本的に英語ですが、場合に応じて日本語でも行います。(Castro's classes are generally taught in English, but may be conducted in Japanese as needed)

教科書・参考書等

必要に応じて授業で紹介します。

評価方法

種別	割合	備考
課題	30%	課題レポート
日常点	70%	授業への積極的な取り組み

メディア表現特論D(設計×情報・メディア) Media Creation D (Design × Information・Media)

担当: 小林茂・桑久保亮太・小田原のどか(非常勤)・山野弘樹(非常勤)

単位: 2単位 履修対象: 1・2年 教室: 講義室W(301)

学期: 後期(10月・11月) 実施方法: 対面・オンライン

科目のねらい・特色

普段の制作や研究において、作品に関する議論は着目されますが、展覧会は作品とは切り離して考えられる傾向にあります。しかしながら、展覧会とは作品を鑑賞するよりも前の段階で人々が触れるメディアです。展覧会をメディアとして捉えると、作品のみならず展覧会の経験全体が設計の対象になります。この連続講義のねらいは、メディアとしての展覧会に関する設計論に関する理解を深めることです。

全体は大きく3つの部分から構成されます。第1は具体論で、作品の制作から展示に至るまでの一連の流れを詳細に確認し、複数のプロセスがあることを詳細な事例紹介から学びます。第2は抽象論で、作品に至るまでのプロトタイピング、プロトタイプとしての作品、そもそも展覧会を含むメディアがどのようなテクノロジーによって構成されているかなど、抽象化して考える際のヒントとなる考え方を学びます。具体と抽象を往還する2つの観点に2つのゲストレクチャーをくわえることにより、複数の視点から展望し、思索し、制作する態度を身に着けます。

到達目標

展覧会をメディアとして捉え、展覧会の経験全体の設計について考えられるようになる。

講義形態

講義とディスカッション

講義計画・項目

1. 10月03日(火)1・2限: テクノロジーをめぐる議論
2. 10月10日(火)1・2限: 制作事例: コンセンサスに基づく作品制作
3. 10月17日(火)1・2限: プロトタイプをめぐる議論
4. 10月24日(火)1・2限: 制作事例: 誤読と流転による作品制作
5. 11月07日(火)1・2・3限: ゲストレクチャー1
6. 11月21日(火)1・2限: ゲストレクチャー2
7. 11月28日(火)1・2限: 総括

教科書・参考書等

- マーク・クーケルバーク『技術哲学講義』直江清隆・久木田水生: 監訳、丸善出版(2023)

- ユク・ホイ『中国における技術への問い——宇宙技芸試論』伊勢康平：訳、ゲンロン(2022)

評価方法

種別	割合	備考
課題	50%	課題への取り組みと内容を評価します。
日常点	50%	講義への出席およびディスカッションへの参加状況の評価します。

メディア表現特論E(設計×身体・環境) Media Creation E (Design×Body・Environment)

担当: 赤羽 亨・平林真実・福原志保(非常勤)・安藤英由樹(非常勤)

単位: 2単位 履修対象: 1年 / 2年 教室: ホールA(センタービル4F)

学期: 後期(12月/1月) 実施方法: 対面(必要に応じてオンライン)

科目のねらい・特色

我々を取り巻く環境は、テクノロジーの進化により大きな影響を受け、それらはシンギュラリティを語るまでもなく、身体へも影響してきています。

本講義では、「設計」をキーワードとしてコンピューティングの進化とそれに伴うコミュニケーションの仕組みの変化、また、工業デザインからスペキュラティブデザインに至る広義のインタラクションデザインのあり方について、各々概観します。さらに、バイオアート、ポジティブコンピューティング(ウェルビーイング)とある意味両極端と思える今後到来する環境・身体の変化について考えて行きます。

到達目標

過去から現在へと連続する環境の変化において、現在の位置を見定めた上で、バイオアートのような身体に関わる変化・進化、ポジティブコンピューティングのようなテクノロジーによる自身の見つめ直しという視点から、未来に向けた設計とは何かを各自が考察し視点を定めらるような新たな議論を行えるようになることを目指します。

講義形態

講義とディスカッションによる対話型の講義、適宜課題が出されディスカッションに利用されます。

講義計画・項目

第1,2回 授業説明およびコミュニケーションシステムに関する講義

第3,4回 コミュニケーションシステム

第5,6回 ポジティブコンピューティング講義およびディスカッション(安藤英由樹)

第7,8回 バイオアート講義およびディスカッション(福原志保)

第9,10回 設計×身体・環境 ディスカッション(安藤英由樹、福原志保)デザイン史から捉えるスペキュラティブデザイン

第11,12回 コンピューティングの歴史

第13,14回 インタラクションデザイン・インタラクティブアート・スペキュラティブデザイン

第15回 まとめリフレクション

教科書・参考書等

授業中に紹介します。

評価方法

種別	割合	備考
----	----	----

課題	40%	課題レポート
日常点	60%	出席並びに受講態度

メディア表現特論F(設計×科学・社会) Media Creation F (Design× Science・Society)

担当・金山智子・吉田茂樹・鈴木宣也・関口敦仁(非常勤)

単位:2単位 履修対象:1年/2年 教室:講義室W(W301)

学期:後期(10月/11月) 実施方法:対面

科目のねらい・特色

21世紀に入りおよそ20年が経過しましたが、技術やシステムと社会の関係は20世紀型のそれとは大きく異なっています。本講義では、21世紀における新たな社会の仕組みを設計する方法について、主にメディア・テクノロジーとアート、デザインの関係の観点から議論し探求することを目的とします。

コンピューターを始めとする情報関連技術や、インターネット等の通信手段や各種サービスの発達・普及が、メディア・コミュニケーションやコミュニティの形を多様化させています。20世紀後半に登場したインターネットは、公共圏全体を拡大していくのではないかという期待に反し、逆に公共圏の分断をもたらしています。インターネットのフィルタリングは異質な他者との対話を喪失させ、極端な二分化を促しています。さらに、2019年末から新型コロナウイルス感染症により世界が同時に危機的状況に陥り、これまで当たり前であった社会やコミュニケーションのあり方を根底から覆しています。21世紀において、人類だけでなく地球にとってこれまでとは異なる社会システムやコミュニケーションを構築していくことが喫緊の課題だと言えるでしょう。本講義では、既存のシステムやコミュニケーションのあり方を確認しながら、これからの社会を構築していくためには何が必要か、どのように変えていく必要があるのかについて考えていきます。

到達目標

メディアテクノロジーやコミュニケーションの、基本的な文献の理解をすすめながら、リサーチやディスカッション、グループワーク等から、メディア・テクノロジーにより形成されてきた現在の社会の姿とその課題を抽出します。課題解決に必要な項目は何かを様々な視点で考え、新しい社会の仕組みを形成するために必要な要素を検討し、それらを使った社会システムについて議論します。それにより新たな社会の仕組みの生成について考えます。

講義形態

座学・ディスカッション・グループワークなど

講義計画・項目

1-2. 授業説明+メディア技術と社会

授業概要の説明を行い、メディア技術と社会の関係性について考え、現在の状況についての理解を深めます。

3-4. メディアと社会

授業概要の説明と、メディアに関する基礎的な考え方を取り上げ、メディアと社会、あるいは個人とメディアの関係について概観していきます。

5-6. インフラと社会

インターネットを始めとする現代のインフラに関する基本的な仕組みと変遷および、社会への影響について概説し、メディアやコミュニケーションと社会の関係を考える際の基礎について学びます。

7-8. コミュニケーションと社会

コミュニケーション技術とコミュニケーションの変容について理解し、これからのコミュニケーションのあり方と社会の関係について考えていきます。

9-10. アートからメディア技術と社会の関係を探る事例

社会システムの中にアートや表現がどう関わるかについて事例から考えます。

11-13. メディア技術と社会の未来

社会システムの仕組みやコミュニケーションについて考察し、今後の社会への影響について考えます。

14-15. まとめ

教科書・参考書等

必要に応じて随時配布、指定します。

評価方法

種別	割合	備考
課題	50%	課題への取り組みを評価します。
日常点	50%	ディスカッションへの参加度合いについて評価します。